
贈り物商会

葉月惣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

贈り物商会

【Nコード】

N8250B

【作者名】

葉月惣

【あらすじ】

不思議なアンティークを使ってご依頼人の本当に送りたい気持ち代行する変わったお店のお話です。ぜひ一度ご用命下さい。

第一話 愛を止めないで

そのメールが届いたのは真夏日が続く無茶苦茶暑い最中のある夜だった。

- おおい、響^{ひびき}、メール来てるぞ。仕事の依頼じゃないか？ -

「おい、人を呼び捨てにするな。お前は私の扶養家族、じゃない扶養猫なんだからね」

私はテーブルの上に置いてあるパソコンをつけてメールをチェックする。メールのタイトルは・・・

- 贈り物依頼の件 -

「おお、お仕事だ！」

- 響、乳液つけた手でキー打つなよな -

猫のクラナドが軽蔑したように横目で私を見ながら言う、というか私の頭の中に思考を送ってくる。こいつは1年くらい前、ひよっこりとやってきた銀色の毛並みの雄猫。外国猫らしいけれど口が悪い。こいつのことを話すと長くなるから、機会があつたらまた話すとして・・・

「あ、いつけない」

私は顔のお手入れ中だったのをすっかり忘れていた。ウェットティッシュで手をきれいにして再びパソコンの前に。私はいそいそとメールを開いた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「贈り物商会」の響さん、初めまして。友人から響さんのことがうかがってメールしました。良子と言います。

23歳、派遣社員です。

「あ、私より2つ若い。派遣社員が、一度やってみたかったんだよね」

「3日もたずに派遣先でプツンするのにな」

クラナドはしっかり間合いをとっておいて茶々を入れてくる。無視して先を読む。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

実は私には付き合っている彼がいるのですが、今年の4月に彼に異動の通達があつて、東京に行かなければなくなりました。あ、私は福岡です。

今までは彼も福岡だったのでしょっちゅう一緒に遊びに行ったり、これからのことを話し合ったりしていました。

ええ、私達は結婚するつもりでした。でも彼が東京に行ってしまったからギクシャクするようになってしまいました。

なかなか会いに行けないし、私も今の自分の仕事をやめて彼のところに飛んで行くわけにもきません。どうも彼が東京に慣れるに従つて、お互いの雰囲気というか、リズムが微妙に食い違ってしまったようなんです。

ありがちな「長距離恋愛」だなんて言わないでくださいね。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

- でも俺にはありがちに思えるがなあ -

パソコンの横にぐったりと寝そべっていたクラナドがつまらなそうに画面を見ながら後ろ足で耳を掻いた。

「クラナド、うるさいな。風呂入るか？」

クラナドはぴょんと飛び跳ねて私の手の届く範囲から逃れた。ちなみにこいつは水が大の苦手だ。

とりあえずうるさい外野を黙らせ、私は続きを読む。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

最近では携帯でもメールでも話がかみあわず、けんかになってしまうこともあります。

響さんは不思議な力を持つ「贈り物」を扱っていらつしやると聞きました。どうか私達がまた以前のようにになれる贈り物を探して下さい。よろしくお願いします。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

- やれやれ、文明が発達して携帯もメールもあつて、地球もこんなに狭くなったと言うのに、恋愛は進化しないな -

それには私も同感だった。そういう意味では人間は進歩してない。でもそこが私は好きなんだけど。

彼女には1週間ほど余裕がほしい、贈り物が入ったら連絡するとメールした。

約束の1週間後、私は彼女を招いた。

依頼者の良子さんはストリートヘアが艶やかで、水色のワンピースの似合うかわいさの感じの女性だった。私とは大違い。(^^;)

「いや、結構手間取っちゃって」

机の上に依頼の贈り物を置きながら言った。

「これがそうなんですか？」

不思議そうな顔で彼女は私と贈り物を見る。それは小さな古い時計だった。金色の台座の上に濃い茶色の艶のある四本の木の柱があり、その真ん中に金色の文字盤があった。長針は淡い水色の、短針は赤の透き通った材質だった。

「ここにね、この時計の鍵があるの」

小さな金色の細かい細工の施された鍵を見せた。

「この鍵で時計のぜんまいを巻くの」

「きれいですね。でもこの時計とまっていますよ。動くんですか？」
私は微笑んでうなずいた。

「もちろん。でも今はまだ動かさないでね。この鍵をペンダントにして彼に贈り物としてあげて。そしてあなたはこの時計を持って帰って。それですべてうまく行くはずだから」

彼女は半信半疑だったようだが、言われたようにすると約束して時計と鍵を持って帰った。

そして11月。

- 響、メールだよ。良子って・・ああ、あの長距離恋愛だ -
それは彼女からの嬉しい知らせだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

響さん、こんにちは。

先日は本当にありがとうございました。私達結婚することになりました。来年の3月の予定です。あの時計と鍵、とても不思議ですね。

彼にあれをあげてから、それまでのことが嘘のように食違いがなくなりました。彼の言うには、あれを身につけてから私のことが以前より身近に感じられ、そばにいらなくても一緒にいるような感じがして落ち着けるようになったんだそうです。

私の方もあの時計を見るたびに、不思議に彼がそばにるように感じて不安がなくなったのです。

ただ、ひとつ困ったのは、ふたりともすぐにでも一緒になりたいという気持ちが強くて、いてもたってもいられなくなってしまったことでしょうか。

でも、結婚できるようになって本当に幸せです。
もう一度お礼を言わせてください。本当にありがとうございます。

もしご迷惑でなければ、ぜひ式に出席してください。
ではまた。

追伸

そういえば、あの時計、いつになったら動かしていいのでしょうか？

- - - - -
- - - - -
- - - - -

私は微笑まずにいらなかった。そして早速返信メールを出した。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

良子さん、おめでとございます。

喜んでいただけ探したかいがありました。実はあの時計はイギリスのあるご夫婦の持ち物だったものです。むろんそのご夫婦はずっ

と昔に天に召されています。

このご夫婦はとても深く愛し合っておられました。あの時計はお二人が結婚の記念に二人で選んで買われたものです。

そしてあるアンティークショップに渡り、何度も修理をされながらずっと動き続けてきたものです。あの時計が動いている力は、そのご夫婦の愛の力のせいでもあります。

さて、その時計を私はあえて止めました。あなたは信じてくれないかもしれないけれど、そのご夫婦には了解をとりました。そして鍵と時計をあなたと彼に別々にお渡ししました。時計は愛しい鍵を、鍵は大切な時計を思い合うのです。その力があなた方にも作用したというわけ。

もともとあなた方がしっくりいかなかったのは、互いがそばにいないことによる「恋人欠乏症」のようなものでしたから、いつでも相手がそばにいる感覚が戻れば、自然にもとの状態に戻れると思いました。

時計は早くまた時を刻みたがっています。そのはやる気持ちがお二人にも伝染したのでしょうか。ねじを巻くのは、おふたりが新しい生活を始められる時が最適かと思います。今度はあなた達がおふたりの愛の時間を刻む番なのですから。

お式ぜひ出席させて下さい。

では今後とも長くお幸せに。

「贈り物商会」 香野 響

- - - - -
- - - - -

無論結婚式には出席させてもらいました。誰にも見えなかったとは思っけれど、あの時計の持ち主だったご夫婦も、新しいふたりの門出に立ち合っていていらっしました。

- 時計 -

人は時を作り、その時の中で暮らす。
けれど時はひとつ間違えれば牢獄にも重い鎖にもなるもの。
あなたの時計のねじを巻いてくれる人はいますか？

またのご用命お待ちしております。

「贈り物商会」香野 響

第二話 ベストフレンド

「まったく最近の男は根性がないな！」

香野響、今日はおかんむりである。すごい勢いでドアを開けて帰ってくる、冷蔵庫をから缶ビール、エアコンのスイッチ・オン、スカートまくりあげてあぐらをかいて一気飲み。

- 分かりやすい性格 -

クラナドは慣れたもので、目立たないようにお気に入りの場所に非難した。彼女は結構キレることが多いようだ。ただ、今日はいつもと少し違っていた。

「まったく、幽霊のひとつやふたつ見えたからってデート途中で放棄するなよ！ 私と付き合ってるやそんなこと当たり前だろ、当たり前前・・・」

缶がテーブルの上でコツンと小さな音を立てた。

「当たり前じゃないよね、普通は・・・」

- 響・・・ -

響の眼から一筋悲しみが頬を伝った。

「私だって本当は普通に女の子したいよ。でも、普通には見えない人達が救いを求めて集まってきたやう・・・なのに私にはそういう人達を助けられる力なんてないんだ、まだ」

声が少し震えていた。

- 分かっているさ。だから「贈り物商会」始めたんじゃないか -

「うん、そう。クラナド、今日は珍しくいいやつだな」

響は照れたように手の甲で涙を拭くとちよつと笑った。

- 響のパワーが全開じゃないとこっちが干上がっちゃうからね -

照れ屋はクラナドも同じらしい。伸びをしながら毛づくろいをしてごまかしていた。

ちょうどその時パソコンがメールの着信を知らせた。

「仕事かな？」

開いてみると案の定贈り物探しの依頼だった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

私、恵といいます。学生です。

友達を助けるために響さんに探してもらいたいものがあるんです。

私と彼女は同じ美大で絵を学んでいるのですが、彼女、最近絵を描かなくなってしまったんです。彼女は押田莊子といいます。

彼女も私も高校時代から絵を描いていましたから、お互いのことはよく分かっています。彼女には才能があるんです。人を惹き付けずにはおかない力を持っているんです。残念なことに、私の絵を描く才能は平凡なものです。だから私自身はそろそろ別の道を考えようかと思っています。でも彼女は違うんです。

むろん、良いものが必ず認められるとは限りません。けれど彼女の才能をこのままダメにしてしまうのは、分かっているだけに惜しいんです。最近では学校にも来なくなりました。彼女の家に行ってもいないことが多く、いても会ってくれないし、電話もだめでした。

どうかよい贈り物をふたりの友情と彼女の才能のために探してください。

よろしくお願いします。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「さあて、ちょっと難しいね、これは」

「ただのスランプってやつじゃないのかね」

「違うような気がする。ちょっと確認しよう」

そう言って響は返信を書き始めた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

恵さん、こんにちは。

メールいただいた響です。ご依頼の件、承知しました。つきましては、準備のためにお二人の写真を送りいただきたいと思います。

一番楽しかった頃のお二人が一緒に写っているものをお願いします。

ご用意させていただく贈り物は見つかるものと思います。ただ、今回は例外的に貸し出しという形にさせていただきますのですが、ご理解いただけますでしょうか？ 恵さんのお悩みが解決された時点でご返却をお願いすることをお願いします。その時期は自然と分かるようになっております。

では2週間ほどのご猶予をお願いします。届き次第こちらからご連絡させていただきます。

よろしくお願いします。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

響、何考えてんだ？

クラナドのヒゲが好奇心でピクピクしていた。

「まあ、見てなよ」

響はいたずらっぽく笑った。

次の日、恵さんからメールで写真が届いた。それは二人が高校生の時の写真だった。二人揃ってセーラー服で写っていた。

「あ、やっぱり若いとオーラの勢いが違うな。ん？」

響が画面に顔を寄せた。

「なんだい？」

「恵さんの友達、本当に才能あるのかもしれないな。画家の人の写真から出るオーラに似てるもの。そして恵さんにも力があるみたい。問題はこのへんかな」

そして2週間が過ぎ、贈り物が恵さんの友人の家に届いた。

「・・・恵から、何なんだろう？」

莊子さんは怪訝そうに包みを解いた。中には豪華な中世風の衣裳をまとった西洋のアンティーク人形が入っていた。

「お人形・・・」

莊子さんは戸惑いを覚えた。その時、不思議なことが起こった。

「莊子さん、恵さんによりかかってはだめよ」

「え、何？」

周りを見回したが人がいるはずがない。

「あなたの才能は多くの人の心に喜びを与えるわ」

「分かった、この人形ね。恵ったらこんな細工をして。自分で絵の才能がないって決め付けて勝手に私から離れようとして。こんなことまでするなんて！」

莊子さんは人形を床に投げつけようとして振り上げた。

「あなたは怖いんでしょう？　ひとりで絵を描くのが。今までは恵さんといつも一緒だったけど、これからはひとりで悩んだり苦しんだりしなくてはならないから」

莊子さんの動きがとまった。その眼に驚きと怯えが広がった。

「ひとりって恐いのよ。知ってる？　ひとつ絵が仕上がると、必ず次にはどんなものが描けるのだろうかって不安になるの。もしかしたらもう次は描けなくなるんじゃないかって」

今度は誰かの助けになるような力のある絵を二人で生み出したいと思っ
ています。響さん、その時は贈り物の候補として考えておいて
下さいね。

あ、お人形は響さん宛に送らせていただきました。

では、画廊を開いた折にはぜひお越しください。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

- ふうん、あの人形にはどんな力があつたのさ？ -

「あの人形には水晶の心臓が入ってるんだ。特殊な水晶でね、人の
エネルギーに反応するんだ。一旦対象となる人の元気な時のオーラ
のエネルギーを設定すると、そのレベルになるまで引き上げようと
するんだ」

- へえ、変わってるね -

「変わってるのは、対象になった人間にはまるで人形が話している
ように感じられるとこかな。そして話しているうちにだんだんとエ
ネルギーが上がってゆくって寸法。本当はね、話している相手は自
分自身なんだ。自分の中にあるもうひとりの自分が、バランスをと
ろうとして語り掛けてくるんだよ。水晶はそれを増幅してくれるだ
け。最後は自分自身の力次第」

- だから写真を借りてオーラを見たのか。でも何で二人の写真だっ
たんだい？ -

「勘だよ。この二人には何か特別な結びつきがあるような気がした
から。そうしたら案の定、恵さんにも才能が光ってた。そして莊子
さんはいつも恵さんに寄り掛かってるのも分かったのさ」

- なあんだ。じゃ響と一緒にじゃないか。いつも俺に頼っててさ -

「言ってる。今晚は自分のメシは自分で調達するんだな」

けれど響の心の中には違う気持ちが浮かんでいた。

・そうさ。私にこの人形がいないのはお前がいるからかもしれない。
い・・・

響は手の中にある人形を見ながらそう思った。

またのご用命、お待ちしております。

「贈り物商会」 香野 響

第三話 心の旅

その夜、響は不思議な夢を見た。

そこはどこかの港のようだった。大きな船、多分外洋に出る客船、が港に停泊してた。周りには多くの人達が船の周りにそして甲板に見えた。荷物を運ぶ乗員があわただしく動き回っている。

その中で、ひとりぽつんと乗船場所に立っている老人に気がついた。響には見覚えのない老人だったけれど、なぜか知っているという感覚があった。

老人は彼女が見ているのに気がつく、何かを訴えかけるように見返した。

- 誰だったろう、この人 -

思い出そうとするけれど浮かんでこない。老人は開襟シャツにズボン、すり減った靴を履いていた。右手には黒光りする木のステッキをついている。響がその様子をじっと見ていると、その時初めて気がついたように老人は自分の格好を見下ろし、驚いたような悲しそうな表情をした。

「おじいさん、あなたは誰？」

響の問いに老人が答えた。

「莊介」

「そうすけ？・・・えっ、まさかソースケさん？」

自分の声に驚いて目が覚めた。

- 響、安眠妨害だぞ。突然大声で -

クラナドめ、いつもは勝手な時間に起きたり寝たりしてるくせに、こういう時だけ文句言って。

「夢見たんだ。ソースケさんが出てきた」

- 響がインターネットのチャットでいつもお世話になったあの人がい？ -

「そうだよ、あのソースケさんさ。あの人には『贈り物商会』始める時もお世話になったし、いつも難しい品物を見つけるヒントをもたらしたりしてたからね」

- でも、響はソースケさんの顔知らないだろ？ -

「うん。顔だけじゃなくて年令もこの人かも知らないよ。でも夢の中のおじいさん、確かにソースケさんだと思う。普通の夢とは感じが違ってたもの。胸騒ぎがするな、何もないといいけど・・・」

けれどそれは現実になった。3日後、彼女のもとに一通のメールが届いた。

- - - - -

響さん、はじめまして。

私は飯田荘介の（いえ響さんには「ソースケ」の方がお分りになると思いますが）孫の愛美と言います。

響さんのことは祖父からいろいろとうかがっていました。祖父は3日前に亡くなりました。89歳でした。

- - - - -

「やっぱりあの夢はただの夢じゃなかったんだ」

- - - - -

祖父はとてもイケてる（ハイカラって言うらしいですね）人でした。若い頃は何度も海外旅行に出かけ、珍しいものや貴重なものを見つけては日本に持ち帰るのを仕事にしていたと聞いています。

最近はインターネットにハマっていて、いろんな人と話すのが楽しみだとしてよく私に話してくれました。響さんのことは、若いのにとっても苦勞している、古いものを愛していてよく勉強しているといつも誉めていました。

祖父が亡くなってから愛用のパソコンに「遺言」のフォルダーを見つけてました。そこにはネットで知合った方々にネット上で集まっていただけで、自分のことを着に楽しくチャットをしてほしいと書かれていました。湿っぽいのが嫌いで、面白いこと変わったことが好きだった祖父ですので、普通のお葬式より「ネット葬」をしてほしいと思ったのだと思います。

勝手なお願いですが、故人の最後のわがままだと思ってぜひご出席をお願いします。現在参加をお願いしてる方々は、明後日の夜12時がご都合がよいとお返事をいただいています。お手数ですが、ご都合をお知らせ下さい。

なお、当日は私もチャットに参加させていただきたいと思っています。

よろしくお願いします。

- - - - -
そして「ネット葬」の当日。

愛美「本日はお忙しいところ、本当にありがとうございます」
ケンタ「僕もソースケさんが亡くなったってメールもらってびっくりしてます。まだお会いしたこともなかったし、ちょっと実感わかなくて」

大黒屋「私もソースケさんにはいろいろと教わったことが多かった

なあ。そういえば響君は会ったことないのかね？」

響「いいえ、私もお会いしたことないんです」

大黒屋「なんと、そうかね。ソースケさん、随分あんたを気に入ってたようだから、てっきり面識があるのかと」

愛美「おじいちゃん、本当は響さんにちよつと気があつたのかも。会いたかつたんだけど、自分がただの『じじい』だと思われるのがいやだつたんじゃないかな。だって昔はこんなにカッコ良かったんですよ」

ちよつと間が合つて、愛美さんからメールが来た。添付ファイルにソースケさんの若い頃のセピア色の写真がついていた。

響「・・・かつこいい」

鼻筋の通つた俳優のような顔立ちだつた。このへんから話が盛り上がり始めて、ソースケさんの武勇伝やら失敗談なんかが次々と語られた。弔問客（になるんだろうな、やつぱり）が次々とやって来ては、思い出を披露していった。その夜のソースケさんは間違いなく私達の心の中に刻み込まれていた。

キーを打ちながら響は画面を見て笑つたり、泣いたりしていた。ソースケさんを見送る集いは明け方近くまで続き、穏やかだけれど、楽しく故人は見送られた。

けれど響はひとつだけ気になっていたことがあつた。あの日見た夢の中のソースケさんの様子だつた。そして今度もまた響の不安が的中した。

それから一週間ほどしたある日・・・

- 最近仕事してないぞ、響 -

お高い缶詰をもらえないクラナドが抗議してきた。

「しかたないだろ、このところなかなか依頼に合うもんが手に入らないんだから」

文句を言う生意気猫にドライフードをやりながら響は言い訳した。

本当はまだソースケさんの死がこたえていた。

- 俺、そのうち味音痴になっちゃうもんね -

言い返してやろうとした時電話が鳴った。クラナドをにらみながら響は受話器を取った。

「はい、贈り物商会です」

「響さんですよ。先日祖父のために集まっていたいてありがとうございました。ありがとうございました。愛美です」

「あ、いいえ。こちらこそお電話差し上げなくて。少し落着かれましたか？」

「そのことなんですけれど・・・」

愛美さんの口調にピンと来るものがあつた。

「ソースケさん、もしかしたらまだ・・・」

愛美さんの息を飲む声がかすかにした。

「すごいですね、分かっちゃうんだ。あの後祖父が夢の中に現われるんです。それも声だけ。『愛美、あれ』ってそれだけ言うんです、毎晩」

「『あれ』ってだけ？」

「ええ。祖父はいつも祖母や母に対して何かしてほしい時、そう言っていました。祖母も母もそれで意味が分かっていたらしいんですけど、今度は私に番が回ってきたみたいなんです。夢のこと二人にも話したんですけど、真面目にとりあってくれないし。で響さんなら分かってくれると思って」

ソースケさん、やっぱり何かまだ心残りがあるんだ、響はそう感じた。

「分かった愛美さん。何とかソースケさんの希望、捜し当てるからもうちょっと辛抱しててね」

響は電話を切ると急いでどこかにメールを送った。

数日後、響はソースケさんの家に着いていた。

「響さん、これ何ですか？」

玄関には宅急便の荷物が並んでいた。

「ソースケさんの旅支度だよ」

響はひとつひとつ包みを開ける。

「あ、これソフトとか言う帽子でしょ？ ええとこれはイギリス製の靴、この大きいのはアメリカ製の旅行鞆ですね」

「よく知ってるんだね、さすがソースケさんのお孫さんだね」

「へへ。実は密かに勉強してたりしたんだ。本当はね、憧れてるの響さんに」

響は眼を丸くした。

「えっ、私？」

「おじいちゃんがよく言ってた、古いものには力がある、その力を人の幸せのために生かせる人は少ないって。響さんだけだって、そういうことのできる人は。私もね、古いもの好きなんだ。いい思い出を一杯持つてる品物が、人の幸せを助けられるならすてきなもの。その出会いを作ることのできる響さんのお手伝いがしたい」

「ありがとう」

響はそれだけ言うのがやっとだった。これまで自分の力が人の励みになるなんて思ってもみなかったからだ。

「じゃ、これから始めるよ」

すべての包みを開くと、愛美に手伝ってもらってソースケさんの部屋に並べた。それは旅行のための品々だった。

「私の夢の中に出てきたソースケさんは船に乗ろうとしてたんだけど、旅支度が整ってなくて困ってた。だからこうして出かけられるようにするの。みてて」

しばらくは何も起こらなかった。

「おじいちゃん、どうしたのかな？」

「しっ、来たよ」

二人がじつと品物を見ていると、

「あっ！」

白い輝きが空中に現われて徐々に人の形になって行く。それは若い時のソースケさんだった。

・響ちゃん、手間をとらせたね・

ソースケさんは粹な背広に身を包んでいた。そして用意された古いけれどしっかりした旅行用品を眺めて微笑んだ。

・うん、いいものを選んでくれた・

そして愛美の方に近づくと、耳元で何かささやいた。孫娘の瞳にいたずらっぽい笑みが浮かんだ。

・さあ、これでやっも行ける。ありがとう、これからがんばっておくれ・

それだけ言い残すと、ソースケさんは消えていった。

「いつちやつたね」

「うん」

「ねえ、愛美ちゃん、ソースケさん何て言ったの？」

愛美は微笑んだ。

「おじいちゃんはね、こんなふうに言ってた。『人は逝く時、親しかった人に贈り物をするのさ。自分が大事にしていた人達を集めて新しい出会いを作ってあげる。自分がいなくなっても愛した人達が幸せになれるようにね』。私分かる。おじいちゃんは響さんと私を出会わせたかったんだ。人に幸せをあげるお手伝いをこれからも続けられるように」

ソースケさんは最後まで粹な人だった。あげたつもりが、贈り物をもたらしたのは私の方だった。

「あ、そういえば愛美ちゃん、ソースケさん・・・」

「うん、見えたよ」

「じゃあ、あなたも・・・」

そして新しい出会いが始まった。それは響がこの仕事を始めてから初めての本当に欲しかった贈り物だったのかもしれない・・・

またのご用命お待ちしております。

「贈り物商会」 香野 響

第四話 卒業写真

ソースケさんが亡くなってから、愛美は響の家によく来るようになった。

「ねえねえ、クラナドって生まれた時から飼ってるんですか？」

愛美が膝の上にクラナドを乗つけて頭をなでながら聞いた。クラナドは嬉しそうに喉を鳴らしている。

「うっん、1年ぐらい前ひょっこり入ってきたんだ。そのまま家の居候」

「おい、クラナド。お前随分かわいぶってんな」

響は愛美に聞こえないように心の中でつぶやいた。

「俺は女の見分け方知ってるもんね」

片目だけ開けてクラナドは響を見返した。

「んだと！」

響が顔をひきつらせているのに愛美が気づいた。

「響さん、どうかしました？」

「あ、いやなんでも」

作り笑いをしながらあわてて否定する響。どうもクラナドは響以外の人間と意思を交わさないらしい。できないのか、しないのか・・・

（ハ―ハ；

「愛美ちゃんの潜在能力はすごいぞ」

「ああ、分かってるよ。性格もポジティブだしきっかけがあったらブレイクすると思う」

「響さん、メール来ました」

クラナドがするりと膝から降りて、愛美が椅子をくるりと机の方に向けてパソコンを開いた。

「どれどれ」

響はメールをチェックした。

- - - - -
響さん、初めてメール差し上げます。太田里美と言います。

実は娘に何か贈ってあげたいと思っっているのですが、よいもの思いつかず響さんならこういう時、必ず力になって下さるとお友達から聞いてメールを差し上げることになりました。

娘は萌と言います。16歳になります。来年アメリカに留学することになりました。

本来なら日本の学校にやりたかったのですが、いじめにあい、人を信じられなくなったのです。無論、娘ともいろいろと話し合い、学校や先生とも話し合ったのですがよい解決方法は見つかりませんでした。

萌や先生との話をまとめると、娘は学校や同級生の「ことなかれ主義」を嫌っている様子で、一方先生は娘の「協調性」のなさを指摘されました。できるだけ親バカにならぬように客観的に両方の意見を理解しようとしておりますが、どうも私には萌の意見の方がまともな思えてなりません。

すべての学校や生徒がそうだとは私も言いません。しかし、生徒をコントロールしようとする先生や同じ生徒同士でも相手をコントロールしようとする行為があるのも事実のようです。

何にせよ、争って相手を負かせばそれを人生の勝利のように考える風潮はいまだ大勢を占めています。けれどそれは人生において得るべき尊いものではないように思えてならないのです。

そんな時、娘は自分で資料を集め、アメリカへの留学を私達両親に話しました。当然私達は反対しました。アメリカが個性を活かし、自分の意見を言える風土を持っているとはいえ、それは一般的な情報で、人種に対する偏見も日本より厳しい勝者と敗者の差もあるのですから。

でも娘はそれでも留学を望みました。もしアメリカにも自分の望むものがなかったら、また別の道を探すと言うのです。彼女は逃げているわけではありません。探しているのです。彼女の感性が求める何かを。

そして私達は留学を許しました。でもとても不安でもあります。せめて彼女に勇気を与えてあげられる贈り物をしてあげたいのです。

お力を貸してください。

[illegible]

「響さん、これ私やります」

愛美が勢い良く立ち上がった。

「私、萌さんの気持ちすごく分かる。人をコントロールする人は自分をコントロールできなくなるんです。それに気づいて自分で新しい道を探そうとする萌さん、すごいと思う」

拳を握り、遠くを見つめる愛美。ちよつとアブない。(^ | ^ ;)

- 熱血だな -

かなりだな、これは

クラナドと響は顔を見合わせた。

「あはれ」

響は気を取り直して愛美に言う。

「これは愛美ちゃんに頼む初仕事だよ。私の注文はポートレート用の額縁。年代は問わない。ただ思いつきがんばって夢をかなえた人の持ってたものを探して。いい？」

「了解！」

愛美はにつこり笑って飛ぶように部屋を出ていった。

- 大丈夫かい？ -

クラナドが見上げた。

「私も欲しいな、あんなエネルギー」

響の口元に微笑みが浮かんでいた。

数日が経った。

「響さあん、あつた！」

愛美は小さな包みを持って響の家を訪れた。

「大変だった？」

「ううん、そんなでも」

愛美は得意げに包みを開いた。それは縦15センチ横10センチほどの額縁だった。銀できていて、四隅に月と太陽、そして天使があしらわれていた。

「うん、いい力持ってるね、この額縁」

響は満足そうに愛美に笑いかけた。

「これね、最近アメリカに渡って成功した画家の持ってたものなんだって」

- 画家？ -

「そう、それで？」

「その画家の人、女の人なんだけど、とてもいい絵を描くの。本屋で見ただけど霊的な力もあるみたい」

響は満足した様子で額縁を置いた。

「よし、それじゃこれを使わせてもらうね。請求書は後で回してね」
「今回は初仕事でもあるし、お安くしますんで」

愛美はちよっとおどけてそう言いながら帰って行った。

「それじゃこれを入れて、と」

響は一枚の写真を取り出すと額縁の中に入れた。

「それが萌って子かい？」

「ちよつと愛美ちゃんにも似てるよね」

「そりやいいんだが、普通両親と一緒に写真とか入れたりしないか？　なんで本人だけ写ってるのさ？」

「いいところに気づいたね。でもこれでいいんだ、後で分かるよ。」

さ、準備はできた。後はうまくゆくことを願うだけ」

そして贈り物は母親から萌に渡され、アメリカに旅立った。その後萌の近況を母親が時々メールしてきた。いろんなことはあったといえ、萌はアメリカで自分らしく振る舞える場所を見つけたとのことだった。そして・・・

- - - - -
- - - - -
- - - - -

お母さん、元気ですか？

早いものですね、日本を発ってからもう3か月になります。

以前にも話したけど、私本当にここに来てよかったと思います。こちでも人間関係や人種の問題なんかはあるけれど、私はなんとか自分のペースをつかんだみたい。

お母さんからもらったあの不思議な写真立て、大切にしています。だつてあれに助けられたからこそまでひとりでやれたんだもの。でもね、正直最初は気味悪かった。がんばらなきゃ、って思ってた何か決心を固めると、次の日あの写真が変わってるんだもの。何でも話せる友達を作ろうと思うと、私の知らない女の子が写真に写ってて、本当にその子に出会って友達になったり、ディベート大会でがんばろうと思うと、賞をもらっている私が写ってたりしてた。

でも、あれは願いをかなえてくれる万能の魔法じゃなかった。努力しないと写真に写ってたものも消えてしまうの。だからかな、自分を信じてがんばれば願いは本当になうって信じられるようになった。おかしいね、今なら日本でもやってゆけるって思う。

私を信じてくれたお父さん、お母さんに心から感謝します。

またメールするね。あ、それから今の私の目標はね、これなの。

- - - - -

メールにはあの額縁に萌の姿が写った画像が添えられていた。そこには卒業証書を誇らしげに持った萌の姿、回りには萌のクラスメイトが写っていた。

- でさ、あの時の写真だけど -

「あ、あれ？ あれはお母さんから借りた写真を私が念写したの」

- うそ、あれどうみても写真だったぜ -

「普通の写真じゃいくら力のある額縁でも絵は変わらないよ。念を入れたものだからこそ願う気持ちを受けて変化させることができるのさ」

- やるな、響 -

「まあね」

響、鼻高々である。

「響さあん、これこの間の額縁の持ち主の。気に入ったから買っちゃいました」

愛美が乱入してきた。手には画集があった。

- 押田莊子画集・・・って前に人形貸し出した時の -

- そう、あの額縁は押田莊子さんのだよ。プラスのエネルギーは他

の人に分けてあげることができるんだ。そして分けても減らない。世の中は巡りめぐっているのさ -

「え、なに？」

不思議そうな顔で愛美が見ていた。

またのご用命お待ちしております。

第五話「明日に架ける橋」

「友達連れてきちゃいましたあ！」

愛美の元気一杯攻撃だ。

- 来たぞ、響。悪いが退散する -

クラナドはそそくさと机の影に隠れた。無理もない、この間ヤツはずーっと愛美ちゃんに「猫っ可愛がり」されていたからだ。可愛いとかわれて帰るまで抱き締められてた。猫のくせに「猫のように可愛がられる」のは嫌いなんだそうだ。猫かぶってっからそういうことになるんだ・

私は内心いきみだ、と思いながら愛美を迎えた。

「あれ？ クラナドいないんですか？」

あいつは机の下に・喉まで出かかったが、

「あ、ちよっとお出かけ・かな？」

武士の情けってやつ。ちらっと机の方を見る。

「そうなんですか」

かなり落胆の様子。手にはおもちゃの猫じゃらしを握っている。

「で、今日は何？」

早めに話題を変えておく。

「あ、そうなんです。贈り物商会のお客さまお連れしました。入って」

愛美の呼び掛けにひとりの女性が入ってきた。

「この人・・・」

そうなんだ、この人私に似ている。独特のオーラが見える。

「ケイと言います。愛美とはメール友達です」

ショートカットで幾分茶色にカラーリングしている。色白でどっち

かと言うと日本美人という感じの顔立ち。短めの黒のジャケットにミニスカート、そしてブーツ。今風ではあるんだけどどっかが違う。何だろう？ そうだアクセサリだ。胸に光るダビデの星のペンダント、指には自分の尻尾をくくわえた蛇、ウロボロスの指輪。

「占い師？」

「どうして分かるんですか？」

愛美とケイがハモって驚きの声を上げた。

「だってそのアクセサリ」

「あ」

ケイは納得と尊敬の声で答えた。

「でも、こういうのってロックやってる人もつきますよね？」

「でもさ、そんなに強いオーラしよってはいないよ」

「うーん、さすが響さん」

愛美は唸った。

「じゃあ話は早いですね、実はケイ、占いを将来の仕事にしたいんですって、ね？」

「ええ、でも日本ではなかなかいい情報や本音で話し合える人が見つからないんです。私、タロット占いが得意なんですけど、本場はアメリカやイギリスなんかなんですよね。ただ、私英語ダメだし」

「それで私にこの状況を打破するものを探せ、と」

「そゆことです」

愛美はにっこり笑った。

「・・・んっ、あれがいけるな」

私は古い小さな整理棚のことを思い出した。

「ね、響さんのうちはびっくり箱なんだから」

まるで自分のことのように自慢する愛美。

「あつたよ、はいこれ」

「これ、ですか？」

ケイは不思議そうに受け取った。

それは古びた小さな紙の袋だった。

「開けてごらん」

促されてケイが袋を開ける。興味津々の愛美。

「種・・・」

それは何かの植物の種だった。

「それを持って帰って植木鉢で育ててみて。あなたの夢を助けてくれるはずだから」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ケイは響からもらった種を鉢に植え、窓際の暖かな日差しの当たる場所に置いた。

「え、嘘、もう芽が出てる」

次の日の朝、鉢を見ると双葉が土から顔をのぞかせていた。そして2日目にはりっぱな葉がつき、3日目には薄紫のユリのような花が咲いた。

「で、何が起こるんだろう？」

ケイは花を見ながらつぶやいた。

- お友達ほしいの？ -

「?!」

誰かの声がした。でも部屋には誰もいない。

「・・・あな、た？」

ケイは鉢植えの花をじつと見つめた。

- ちよつと待ってね・・・ -

声は頭の中に直接届いているようだった。

- えむ・えー・あーる・あい・おー・えぬ・あつとまーく・・・ -

「え、ちよつと、何？」

- 私の知ってるあなたの友達になつてくれる人のアドレス -

私は何が何だか分からないまま、花が教えてくれるメールアドレスを急いで書き留めた。

- その人もお友達を欲しがってるよ -

「マリオンって言うんだ、その人」

・そう、イギリスの人・

「え、だって私英語できない・・・」

・私が教えてあげる・

何だかすごいことになってきた。でも面白そう。ケイは早速教えてもらったアドレスに「日本語」でメールした。日本語でメールしたら向こうでは文字バケしてるかもしれない、と思ったが、とりあえず英語できないからいいや、と納得(?)して書いてみた。

「初めまして。私ケイと言います。日本でタロット・カード占いを仕事にしようと頑張っています。でもなかなか話のできる人がいなくて困っていました。」

信じられないかもしれないけど、私、あなたのメールアドレスをお花から聞いたんです」

ケイはいろいろと日頃の悩みや不安などを書いて送信した。

「本当に届くのかな？ それに変な人間だと思われるだろうな」

・私がいるから大丈夫・

「ま、あなたの言うことを信じるわ。響さんがくれたものだから、きっと何かがあるんだと思うし」

そして次の日、本当にマリオンからメールが来ていた。

「あ、来てる！ でもやっぱり読めないよ、英語だし」

・親愛なるケイへ・

「え、うっそー！」

花がメールの内容を訳して教えてくれていた。

・私もあなたのようにタロット・カードで身を立てようと思っていたる20才の学生です・

メールの内容から、マリオンのところにもケイと同じ花があること、その花は響のような不思議なアンティークを扱うお店でもらったことが分かった。マリオンはとても博学で人と話すこと、人に何かを

してあげることが好きな女性であることが分かった。

二人はメールを交わすうち、瞬く間に親しい友達になっていった。

そしてある日、

- ハイ、ケイ。ビッグニュースがあるの。ネットで知り合った人からの紹介で占いをする場所を提供してもらえることになったの！ -
「すごい。やったじゃない」

ケイは自分のことのように喜んだ。

- あるホテルのラウンジにコーナーを作ってくれるそうなの。イギリスでは有名な占い師がそうして有名になって行くケースがあるの -
「いいな、日本じゃそういうのってないからな」

- ケイもがんばって夢を実現させてね。私の方からも参考になりそうな情報はどんどん流すからね。じゃあまた、バイ -

マリオンは一步夢に近づいていた。がんばらなくちゃと、とケイは自分に言い聞かせた。

けれど、ケイの夢はどんどん遠くなって行くように感じられた。海外では占い師は人生そのものに対するカウンセラーやアドバイザーとして高い地位を得ている人もいるけれど、日本では見せ物かうさん臭い変わった人間ぐらいに見る人が多い。

確かに未来を見ることもある。でもそれだけが占い師の仕事じゃない。今をどう生きるかに対してアドバイスすることが大切だとケイは思っていた。多くのお客さんは、今の自分を変えることよりも、やってくる未来が良いものかどうかばかりを聞く。

そしてよい未来を見つげるために必要なアドバイスをしても、

「お前みたいなお嬢さんに意見されるために来たんじゃないよ」
と機嫌を悪くして帰ってしまう。

でもそんな人に限って後に暗い影がついている。本当はそういう人

たちにこそ、聞いて欲しいことが一杯あるのに。

- ケイ、マリオンからメール -

花がメールの到着を知らせてくれる。マリオンは色々な人にできるだけのアドバイスをして、時には一緒に悩み、励ましながら少しずつお客さんの信頼を得ていた。

ケイはあせっていた。私のやり方がいけないのだろうか？ 占い師という職業をもっと違ったものとして認めてもらうにはどうしたらいいのか？ でもそれをマリオンに話すことはできなかった。これは自分で解決しなければならぬことだと思ったからだった。

やがてマリオンからのメールは開かれないうちにまたまっていた。

- ケイ、お水が欲しい -

花がそう言っているのも耳に入らなくなっていた。

そして花は枯れた。

- - -
- - -
- - -
- - -

「響さん、ごめんなさい。花が枯れてしまったんです」

ケイは泣いていた。

「せっかく友達を見つけてくれて、話し合うこともできるようになったのに、私、自分で全部ダメにしてしまったんです」

響は黙って聞いていた。

「占うことよりも、その人にとってもっと大事なことがある。それを話したくてこの道を選んだのに、それができない自分がいやになって。そうしたらもうすべてにやる気がなくなってしまった」

「誰だってそうだよ、ケイ」

響が優しく手を握った。

「何かを始めようとする時、みんな不安になる。本当に自分はこれでいいんだろうか？ってね。でも相手を変えるのは難しい、なら自分が変わって行けばいいんだ。ただ、相手にへつらうことはない。やり方がほんの少し違うだけなんだよ、そういう時は」

「でももう花はないし、マリオンももうメールをくれないと思う」「大丈夫だよ。ケイがその気になればものごとくも思う方へ変わって行くから」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

そして数日後のある日、海外から小包が届いた。

「・・マリオン！」

ケイは急いで包みを開けた。中には大事に包まれた箱が、そしてその箱の中には綿に包まれた種が入っていた。箱にはカードがついていた。あわてて埃をかぶった辞書を引っ張り出すと懸命に英文を読んだ。

・ケイ、心配しています。もしかしたら花が枯れてしまったんじゃないかと

もしそうならこの種でもう一度花を咲かせて。そしてまた話をしましょう。

私、あなたに話したいことが一杯ある

あなたの友、マリオン・

ケイは泣きながら笑っていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

・ケイ、マリオンからメール・

花がメールの到着を覚えてくれる。

「ありがとう。でももう訳してくれなくてもいいの。自力で英語読むことにしたから」

でも、そうしたら私、することがない

「だったら、あなたの種をちょうだい。占いをする人に少しでもよい人生を見つけることができるようにあなたの力を貸してあげたいから」

- ケイ、ありがとう。私はあなたがそう言ってくれるのを待っていた
私はそうして増えて行くことが一番幸せ -

「私こそ。こうやって人と人を結び合わせることの大切さを、あなたから教わったんだもの」

[illegible]

「また来ちゃいましたあ、クラナドいます?」

- 逃げるよ、後はよろしく -

「晩飯には帰れよ」

響は面白そうにその様子を眺めていた。窓辺には薄紫の花が涼しげに咲いていた。

またのご用命お待ちしております。

第六話「パセリ・セージ・ローズマリー&タイム」

今日は雨。細い細い銀の糸が音もなく降りてくる。

「こんな日の散歩もいいよね」

響は独り言を言いながら急ぐこともなく街をそぞろ歩いた。けれどクラナドは雨を見て朝から不機嫌。

「んだよ、一面水浸しかあ？」

その表情を思い出して笑ってしまう響。

「日本にいたら雨も楽しめなくちゃな」

今日は仕事もない。久しぶりにのんびりした気分だった。

「なんか仕入れにキャナル行くな」

土曜日の午前中、雨のせいもあって、キャナル・シティの客足は珍しくまばらだった。華やかなショーウィンドウ、人々の交わす会話とBGM、ゆったりと流れる時間。どこというあてもなく店から店をひやかして回る。

「あ、そういえばハーブティー切れてたな。買つとこ」

お気に入りのハーブ専門店「ボタニカルズ」に寄る。

- 絶滅しそうな植物は取扱いません -
- パッケージより品質を重視します -

「このフリーズが気に入っちゃったわけなんだよね」

響はお店に掲げてあるモットーを見て一人うなずく。

「こんにちは、何か新しいの入ってます？」

お店の女性に声をかける。

「あ、響さん、いいところに。『ぶつつん』によく効くリラックスするハーブがあるんですよ。ちょっと待ってて下さいね」

「う・・・」

よく分かってらっしゃること・・・

待っている間に並べられているハーブを眺めていた。

「あの・・・『贈り物商会』の響さん・・・ですか？」

ふいに後ろから声をかけられた。振り向くとダークグレーのストラ
イプスーツのバッチリ決まった女性が立っていた。年齢は20代後
半ぐらい、髪は短め、指輪もイヤリングもしていない。隙のない雰
囲気が印象的だった。

「ええ、そうですが・・・」

「よかった。通りかかったら響さんのお名前が聞こえてもしかした
らと思って。偶然こんなところでお会いできるなんて、私こういう
者です」

まるで役者のように無駄のないしぐさで女性が差し出す名刺を受け
取った。

「あー『企画営業部』の城ノ内淳子さん、なわけですね？」

何か納得している響。

「インターネット検索でヒットして響さんのことを知りました。一
度ぜひお会いしたいと思っていました。会社がこの近くなんです」

「何か贈り物でお困りのことが？」

「いえ、私自身に贈り物をしたいと思ひまして」

お休み返上の響。

「・・・ということで、女が本当の力を評価されるにはかなりの努力
と駆け引きが必要になります。その点は響さんもご了解いただける
のではないかと思います」

喫茶店に入って話を聞くことになったのだが、どうもこの手は苦手
である。

「・・・分かりました。で、ご依頼を具体的に教えて下さい」

すると淳子さんのトーンが少し変わった。

「もう響さんも十分分かっていらっしやると思います。私、いつのまにかこんなしゃべり方ばかりするようになってしまいました。忙しすぎる日常、夢と現実の落差、どこかで立ち止まってゆっくり考えたと思うのに、立ち止まったら追い抜かれるという焦り・本当はどこかでほっとしたい。でもどうすればそれが手に入れられるのかが分からなくなっていて・・・」

少し鼻声になっている。

「ありきたりの旅行やリラクゼーションなどでは到底効果はないんです。『がんばったね、これはご褒美だよ』って心の底から喜べる自分への贈り物をしたいんです。見つけて下さいますか？」

依頼を引き受けた響は帰り道、様々に思いを巡らせていた。女性の仕事、やりがい、悩み・・・それは響自身にも重ね合わせる事ができる。「自分への贈り物」、難しい依頼だった。

「リラックスかぁ・・・」

ふと買ってきたハーブを見る。にっこり笑う響。ちよつと不気味・・・

(^ _ ^) ;

「ってわけでさ、依頼されちゃったんだよ。でもね、あれって『こりすぎちゃった肩』みたいで、ちよつとやさつとでほぐれそうにないんだよね。私の悩みに似てなくもないんだ」

ため息をつく響。

「何だよ、もしかして俺にSOS出してるわけ？」

「へへへ、分かりが早いね」

「高級ネコ缶2週間分」

「1週間」

「10日」

「よし、手を打った」

「で、俺に何しろって？」

「彼女の『ガーディアン・アニマル』やってほしい」

- 夢の道案内い？ -

「そう。準備は私がする。がんばってね（＾ー＾）／」

クラナドはイヤな予感がした。高いネコ缶についたかもしれない・

「・・・というわけで、あなたがスペシャルにリラックスできるハーブ・ティーをご用意させてもらいました」

淳子さんの家に着いた響は、小さなガラス瓶に入ったハーブを渡す。

「もしかして何かトリップするようなものが入っているとか・・・」

「あーないない、そゆのは。ただ普通手に入らない変わったハーブは入ってるけど」

怪訝そうに淳子さんが瓶を持ち上げて眺めている。

「ついでだから私も一緒にいただいていい？ 安心でしょ？」

二人分をカップに注いで飲む。

「何だか眠くなりますね」

あくびをしながら言う。やがてまぶたが閉じて寝入ってしまった。

「頃合いだね。クラナド！」

隠れていたクラナドが出てきた。

- 他人の心に入るのは気持ち悪いんだよな -

ぶつぶつ言いながらも猫は眠っている依頼人の膝の上に乗ってじっと見つめる。

淳子さんは夢の中を漂っていた。辺りはミルクのように濃い霧が包んでいる。

「よっ、お待たせ」

ふいに目の前にひとりの男が立っていた。

「誰、あなた？」

淳子さんは引いた。長身で彫りの深いわりといい男だ。銀色のツィードを身に纏い、豊かな銀色の髪とブルーグリーンの瞳をしている。

「私はあなたの夢案内人。あなたへの贈り物を請負った。さ、こち

らへ」

案内人は手を取るとふわりと宙に浮んだ。

「どこへ行くの？」

「あなたの『心の樹』をお見せしに」

一瞬気が遠くなったと思ったら、目の前には巨大な樹がそびえていた。

「トトロのクスノキみたい」

「これがあなたの心の樹。来て」

案内人が地下へ潜る。そこには無数の根が張っていた。

「これ分かる？」

一本の根を指差す。淳子さんが目を凝らすと、ひとつの映像が浮かんできた。

「あ、これクライアントと喧嘩した時の」

「そう、あなたは度重なる理不尽な担当の要望に立ち向かった」

「でもそのせいであのクライアントの仕事来なくなったのよ」

「じゃあ、これを見て」

案内人は一気に樹を上昇して行った。そしてひとつの枝に着いた。

「時田君と榊原さんだ」

同僚が話している風景だった。

「じゃあ今度のクライアントの要求、適当にやっときましようか？」

「駄目よ、私達が良いものを提案しなくなったら誰がやるの？ 城

ノ内さんを見習ったら？」

「分かるかい？ あなたの張った根がこういう形で新しい枝や葉になってるんだよ」

案内人は同じようにいくつもの根から枝へと行きつ戻りつした。その中には、過去の失敗をうまく消化してプラスに変換している彼女自身の姿もあった。彼女が張った根が、どこでどんなふうによい枝を伸ばしているかを初めて彼女自身理解することができた。

彼は淳子さんと一緒に樹のてっぺんに昇って下を見ながら語りかけ

た。

「人は自分の過去の経験のイヤな部分ばかりを見る。でも、本当はその経験が自分自身や人の中ですばらしい枝を育てていることに気づかない。がんばることも大切だけど、時にはその経験が何を生み出しているのか振り返ってみてはどう？ 経験は知恵に変わる。この樹の別の名前知ってる？ 『知恵の樹』って言うのさ。これは夢の中だけど、この樹はあなたの心の中にちゃんと存在するんだよ」その言葉を聞いているうちに意識がふつと遠のいた。

「淳子さん・・・」

はつとして飛び起きてみると、自分の家だった。

「私、夢を見て・・・経験が樹になって・・・」

響が笑った。

「今の気分は？」

「何だかとっても楽。あの夢・・・」

「そう、ご用意させていただいた贈り物」

「あの案内人は？」

「うちの専属です。手出しちゃ駄目ですよ」

彼女は屈託なく笑った。もう大丈夫だ。

「あれ？ この銀色の毛、何だろ？ 猫の毛？」

今日もまた雨。クラナドは不機嫌。

「あの依頼人、人間にしとくのはもったいないよな」

「そう？」

「そういう意味では響もな」

「猫になんぞなりたくないわい」

「響が猫になったら付き合ってもいいんだぜ」

「？」

不覚にも赤くなっている自分に気づいた。何でだ？

あの時、響も淳子さんの夢の中にいた。そして案内人であるクラナドの姿を見ていた。その姿はどこか懐かしく、彼女の胸を高鳴らせたのだった。

- うちの専属です。手出しちゃ駄目ですよ -

あの言葉はあながち冗談ではなかった。でもどうして？

細い細い銀の糸が音もなく降りてくる・・

またのご用命お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8250b/>

贈り物商会

2010年10月28日08時54分発行